

「風景構成法」に関する研究

— 箱庭作品との関連 —

弘田洋二, 小野浩子, 森鼻雅代, 武田宜子, 岩堂美智子

A Study of "The Landscape Montage Technique"

— Relationship between the drawings and the Sand Play pictures —

YOJI HIROTA, HIROKO ONO, MASAYO MORIHANA, NORIKO TAKEDA

and MICHIKO IWADOH

問 題

箱庭療法は, Lowenfeld, M. によって発表され, Jung派のイメージおよびシンボルについての考え方を導入した Kalff, D.⁵⁾ によって発展させられたものである。日本では, 河合によって紹介され, 現在広く臨床場面において活用されている。非言語的療法として, 箱庭療法が急速に日本で発展した背景についても河合が考察しているが, 言語化によるコミュニケーションとは異なった形で, 患者の内的世界が表現されるということは, 最も大きな特徴であろう。砂箱の中に構成される世界全体のイメージを思い描きながら, 玩具棚に向かったり, また, そこにある玩具によってイメージが賦活される。最初に思い描かれたイメージが, その過程で訂正されたり, あるいは, 自分自身では予想もしなかった方向に, 全体のイメージが展開してゆくこともある。すでに直面する用意のあったイメージや, 思いがけなく直面してしまうことになるイメージが, 砂箱の中に作り出されるのである。その過程が, そばに居る治療者の理解, 体験の共有と安定性などに支えられて, 患者の洞察および自己受容的な安定感をもたらすとき, 治療的でありうると解される。

他方, 風景構成法は, 中井⁶⁾によって考案された描画法であり, 主に, 言語的コミュニケーションの困難な分裂病患者を対象として開発されたものである。風景構成法は箱庭より示唆を得たものであり, 分裂病者は, 川に橋をかけないなど箱庭に見られるのと同じ反応がみられ, 箱庭療法の知見から得られる示唆があることも報告され

ている。風景構成法は, 第一に風景画を描くよう要求すること, 第二に, あらかじめ知らされてはいないが, 川, 山, 田(または畑), 道, 家, 木, 人, 花, 動物, 好きなものを何でも, という順に課題アイテムが与えられること, 第三に, 2次元の紙の上に3次元の風景を構成しなければならぬことが, 箱庭との重要な相違であろう。風景構成法については, 分裂病の破瓜型, 妄想型, 陳旧型の各患者の描画特徴が報告されており, コミュニケーションの手段としてだけでなく personality assessmentの一方法として使用されることも多くなっている。また, 箱庭が, 治療場面において, 継続的使用による流れのなかで, 内容の変化を中心とした総合的評価に重きを置かれるのに対し, 風景構成法の継続的使用においては, その構成面の評価をもとに, 治療的变化が報告され⁴⁾¹⁰⁾る傾向にある。

風景構成法が, 中井⁷⁾自らが言うように, 箱庭にヒントを得て成立したものであるとしても, 以上のような両技法の相違があることも確かである。したがって, 同一被験者に実施した風景構成法による描画と箱庭作品の間に, 類似性があると単純に仮定することはためらわれる。なかでも, 箱庭療法の適用決定の問題についての以下の見解を考慮すると, 事情はさらに複雑であるように思われる。中井は, 急性期の患者への箱庭療法の適用を危険であると言っている。そして, 風景構成法による描画は, 危険を避けつつ, 箱庭療法への導入の目安ともなると考えている。河合⁵⁾も, 箱庭において, あまり荒れた表現をすると, あとでひどいacting outがおこることや, 病状が悪化する危険性を指摘している。これらの箱庭療法

の適用決定に対する警告は、砂箱のもつ退行促進的効果への配慮を要請したものであろう。そうすると、そもそも、風景構成法による描画と箱庭とは、被験者は、異なったレベルでの対応を迫られているのかも知れない。その場合、風景構成法による描画は、同一被験者の箱庭作品についての、何らかの予見性をもつことができるのであろうか。たしかに、風景構成法には、「あなたのなかの流れる部分、動く部分、住む部分、お花の部分」といったように働きかけることによって、衝動を鎮静化する作用があるように思われる。しかも、描き手は、それらのものを、意識的に、小さく描いたり、遠くに描いたりというやり方などで操作できる。箱庭では、むしろ玩具の側が、無意識にあるものを刺激し、引き出すような作用があり、外からの指示がないので、引き出された興奮を自ら收拾してゆかねばならない。したがって、防衛のレベルが異なったイメージが表現される可能性も強いのではないとも考えられる。さらに両技法はいずれも、クライアント-セラピスト間の治療関係によって、表出される作品が大きく影響を受けるものである。両技法を検討する実験的研究をおこなう場合は、この点への配慮も忘れてはならないだろう。

以上のように、この二つの技法を単純に比較検討するにはいくつかの疑問が残るわけであるが、本研究において私たちは、一般大学生を対象として、あえて両技法により表出された同一被験者の作品の比較を試み、その検討を通じてさらに両者の違いや共通性を考察したいと考えた。風景構成法、箱庭療法ともに、日常私たちはもっぱら事例研究を通してその有効性を学んでいる。作品の解釈における一般の妥当性や、治療技法導入に際しての臨床的判断を向上させるために、本研究で試みた数量的検討が役立つものと考えられる。

目 的

同一被験者における、初回時の風景構成法による描画(以下LMと略す)と、箱庭作品(以下SPと略す)の類似点と相違点を明らかにする。

方 法

1. 被験者 大阪市立大学学生(女子)20名

2. 教示 ①風景構成法: あらかじめサインペンで枠づけしたA4の画用紙を用い、集団場面において実施した。「今から言うものを、言ったものから順番に描いていって下さい。そして、最後には、それらが全体としてひとつの風景、景色となるようにして下さい」という教示を与えた。各自が一つの課題アイテムを描き終わる

頃を見計らって次の課題アイテムを指示した。「川、山、田または畑、道、家、木、人、花、動物、石または岩、最後に描きたいものを何でも」という順に課題を与えていった。これらの全アイテムを被験者がサインペンによって描き終えた後、クレヨン(20色入り)を与え彩色してもらった。

②箱庭: 本学プレイルームまたは面接室に設置された箱庭療法用のミニチュア玩具と砂箱を用いて、個別に実施した。「ここにある玩具を使って、この砂箱の中にあなたの好きな世界を作り上げて下さい。時間は自由です」と教示した。作られた箱庭はスライドにして資料とした。なお、順序効果を相殺するために被験者を二群に分け、①②、②①と順序を入れ替えて施行した。

3. 実施期間 1987年5月~7月

4. 整理の方法 ①S-D法評定による印象の比較: 高柳、一谷らの研究を¹¹⁾¹²⁾参考に選択した28項目の形容詞対により、各被験者のLMとSPを評価した。評定表は、筆者ら5名の他、臨床心理専攻の大学院生5名計10名である。各被験者の評定結果を相関係数および平均値の差の検定により検討した。

②LMの特徴とSPの対応; (i) LMとSPにおける同一のパーツ比較 (ii) LM有効分析項目とされている特徴をもつLMに対応するSPの特徴の有無 (iii) (ii)で選ばれた各SPのS-D法評定にみられる特徴、以上3点を検討した。

結 果

1. S-D法評定による作品の印象比較

各被験者のLMについて10人の評定者が行なったS-D法評定を得点化(1~7点)した。被験者ごとにLMの1つのS-D尺度における10人の評定点の平均値を算出した。その平均値を1つのS-D尺度における、その被験者の得点とし、28の尺度についてそれを求めた。SPについても同様の手続きで、各被験者の尺度ごとの得点を求めた。

1. LMとSPの相関

まず、LMとSPの関係をみるために、尺度ごとに両作品の相関係数を求めた(表1-(1))。28尺度中、0.4以上の相関係数が得られた尺度は、「気持ち良い-気持ち悪い」($p < 0.001$)、「丁寧な-雑な」「激しい-穏やかな」「異常な-正常な」「ありふれた-珍しい」「男性的-女性的」(以上、 $p < 0.05$)、「闘争的-平和的」($0.05 < p < 0.10$)の7尺度であった。

2. LMとSPの平均値の差の検定

次に、尺度ごとに全被験者のLMとSPの得点の平均

表1. S-D法評定によるLMとSPの印象比較

(1) 項目	(2) 相関係数	(3) 平均得点 (標準偏差)		(4) t 値
		L M	S P	
貧弱な—豊かな	0.11	4.180 (0.822)	4.470 (0.929)	-1.1078
繊細な—粗野な	0.34	4.040 (0.976)	4.065 (0.855)	-0.1057
拡大的な—収縮的な	0.11	3.730 (0.765)	4.095 (0.749)	-1.6118
丁寧な—雑な	0.55*	3.965 (0.880)	3.925 (0.898)	0.2129
硬い—柔らかい	0.17	4.080 (0.698)	3.885 (0.749)	0.9355
気持ち良い—気持ち悪い	0.58**	4.065 (0.766)	3.975 (0.779)	0.5698
明るい—暗い	0.36	3.765 (0.829)	3.925 (0.988)	-0.6927
鋭い—鈍い	0.33	4.040 (0.488)	4.160 (0.514)	-0.9209
厚い—薄い	0.32	4.010 (0.759)	3.770 (0.731)	1.2308
ありふれた—珍しい	0.48*	4.745 (0.674)	4.415 (0.698)	2.1024*
重い—軽い	0.37	4.110 (0.840)	3.780 (0.898)	1.5086
陽気な—陰気な	0.23	3.985 (0.775)	4.110 (0.842)	-0.5552
激しい—穏やかな	0.53*	4.405 (0.865)	4.345 (1.345)	0.2342
優れた—劣った	-0.29	4.160 (0.634)	3.955 (0.572)	0.9464
異常な—正常な	0.50*	3.985 (0.585)	4.300 (0.719)	-2.1358*
動的な—静的な	0.36	4.165 (1.051)	4.175 (1.264)	-0.0338
楽しい—苦しい	0.36	3.900 (0.721)	3.985 (0.960)	-0.4029
きれいな—汚い	0.25	3.555 (0.660)	3.510 (0.777)	0.2281
広い—狭い	0.09	3.795 (0.692)	3.815 (0.670)	-0.0971
嫌い—好き	0.15	4.020 (0.670)	4.110 (0.546)	-0.5056
高い—低い	0.32	3.930 (0.667)	4.385 (0.484)	-2.9549**
面白い—つまらない	0.18	3.820 (0.762)	3.985 (0.549)	-0.8613
うれしい—悲しい	0.28	3.975 (0.646)	4.170 (0.666)	-1.1061
複雑な—単純な	0.16	4.470 (0.778)	4.375 (0.740)	0.4316
よい—悪い	0.29	3.960 (0.495)	3.965 (0.467)	-0.0388
闘争的—平和的	0.42°	4.910 (0.935)	4.645 (1.481)	0.8575
男性的—女性的	0.47*	4.465 (1.025)	4.330 (1.484)	0.4473
まとまった—雑然とした	0.26	3.890 (0.866)	3.710 (0.816)	0.7887

** p < 0.001

* p < 0.050

° p < 0.100

値をそれぞれ求めた。両作品から受ける印象に差があるかどうかをみるため、尺度ごとにLMとSPの平均値の差の検定を行なった(表1-(2), (3))。

その結果、「高い—低い」(p < 0.001), 「ありふれた—珍しい」「異常な—正常な」(p < 0.05)の3尺度において有意差が得られ、SPに比べてLMの方が「高く、珍しく、異常な」という印象を評定者に与えていた。その他の25尺度においては、両作品の平均得点に有意な差は認められなかった。

3. まとめ

相関の高低及び平均値の差の有無により、28の尺度は

次の4群に分類される。

相関が高くかつ平均値に差があったのは、「ありふれた—珍しい」「異常な—正常な」の2尺度であった。即ち、LMで「珍しく、異常な」印象を与えた被験者は、SPでもそのような印象を与えるが、LMの方がより「珍しく、異常な」印象を与えやすいということである。

相関が高く平均値に差がなかったのは、「丁寧な—雑な」「気持ち良い—気持ち悪い」「激しい—穏やかな」「男性的—女性的」「闘争的—平和的」の5尺度であった。これらの次元では、両作品は類似した印象を与えている。

相関は低いが平均値には差があったのは、「高い—低い」の1尺度であった。この尺度に関しては、LM, SP共に平均値は4に近く分布も中央付近に集中している（標準偏差が小さい）が、その中でSPの方がLMに比べて「低い」という印象を与えている。

相関が低く平均値にも差がなかったのは、上記以外の20尺度であった。これらの次元に関しては、同一被験者のLMとSPの印象が似ているとも似ていないとも判断し難い。

「鋭い—鈍い」「良い—悪い」「優れた—劣った」「好き—嫌い」等の尺度においては、LM, SP共平均値が4に近くかつ標準偏差が小さく、平均得点が中央に集中していた。今回これらの次元に関して、両作品の印象の評定が難しかったのではないかと推測される。

一方、「貧弱な—豊かな」「まとまった—雑然とした」「複雑な—単純な」「陽気な—陰気な」「きれいな—汚い」等の尺度は、平均値は中央付近にあるが標準偏差が大きく、各得点は散らばっている（この傾向は特に「貧弱な—豊かな」の尺度において著しい）。又、相関係数も0.3未満であり、これらの次元ではLMの印象からSPの印象を予測することはできないということになる。

最後に、同一被験者の両作品の評定平均値が似通ったものと差が大きかったものを各々1例ずつあげておく（図1・2）。

II. LMの特徴とSPの対応

LMの課題アイテム順に、LMとSPの対応関係の有

無をみていく（表2参照）。なお、S-D法評定については、該当するLMの特徴がみられた被験者のSPのS-D評定値が各々<平均値±1標準偏差>の外にあった時のみ、その項目について平均と比較して特徴があるとみなし、とりあげた。

1. 「川」について

「此岸なしの川」は2例あった。この2例のSPには、共通して怪獣が置かれ、戦いの光景が作られていた。S-D法評定においても、平均と比較して、「重い」「激しい」「苦しい」「悲しい」という印象を与えていた。「途切れていた川」「右上から左下に流れる川」「真横に流れる川」の特徴を示したLMと、それらのSPには特記すべき対応関係はなかった。

2. 「山」について

描かれた山が「単山」であるLMは4例あった。それらのSPには、置かれた玩具の大小関係が異様に歪んでいたり、大きな怪獣があばれていたり、全体の統一性を破壊するようなものが置かれていたりという特異な表現がみられた。LMにおいて「稜線越え」が描かれた2例のSPには、顕著な特徴はみられなかった。

3. 「田または畑」について

田あるいは畑の面積が用紙の1/10以下の田あるいは畑を「小さい田」とした。課題欠如が1例あり、「小さい田」は3例であった。この4例のSPに共通した特徴はみられず、「小さい田」の3例だけに限っても同様であった。

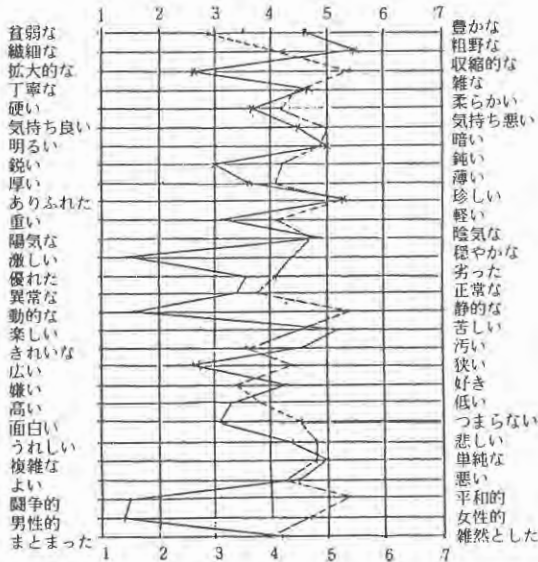


図1

— 箱庭
..... 風景

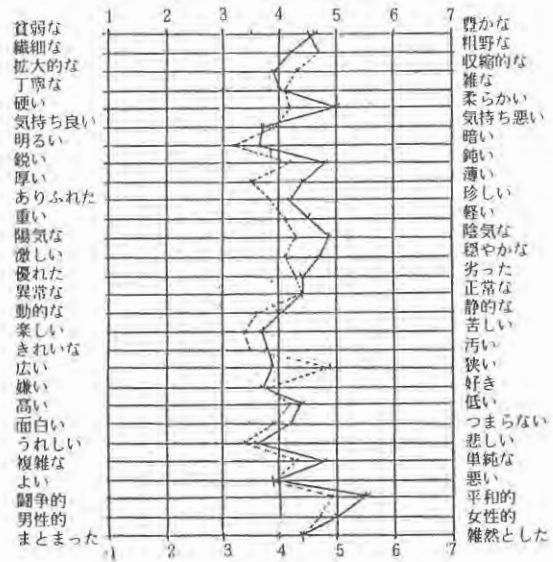


図2

— 箱庭
..... 風景

表 2. 風景構成法における30の分析項目とその表出人数

		サイン		人数	%			サイン		人数	%
1.	川	途切れた川		2	10	7	人	人が単数		12	65
		右上から左下に流れる川		13	65			動く人		5	25
		真横に流れる川		1	5			大きさのバランスを欠く人		0	0
		此岸のない川		2	10			後向きの人		2	10
2.	山	単山		4	20	8.	動物	日常生活において見うけられにくい動物		0	0
		陵線越え		2	10			愛玩動物		14	70
3.	田畑	小さい田		4	20			家畜		6	30
4.	道	山道		9	45			飛ぶ鳥		9	45
5.	家	窓・ドアのある家		16	80	9.	石	さかな		4	20
		画面からはみ出している家		4	20			人の大きさ<動物の大きさ		0	0
		家が1戸のみ		13	65			人工的な手が加えられた石		3	15
6.	木	枯れ木		1	5	10.	付加物	巨大な石		2	10
		木が1本のみ		4	20			橋		7	35
		記号化された人間像		7	35	11.	その他	混色表現		17	85
		異性		12	60			気になる余白		2	10

4. 「道」について

「山道」を描いたのは9例あった。9例のSPには、共通した顕著な特徴は見出せなかった。

5. 「家」について

「窓、ドアのある家」「画面からはみ出している家」「家1戸のみ」の3項目とも、対応するSPに特記すべき関係はみられなかった。「家1戸のみ」に関しては、13例中11例のSPに複数戸の家が置かれていた。

6. 「木」について

「枯れ木」「木が1本のみ」のLMと、それらのSPには、顕著な特徴は見出せなかった。SPでは、木を置けば、複数置き、1本のみという例はなかった。

7. 「人」について

「記号化された人間像」を描いたLMは7例あった。私達は、人間像が記号そのものである場合と、記号化された人間像でありながら顔の造作や服、髪の毛が描かれた人間像を区別した。前者は3例、後者は4例であった。前者3例のSPには、いずれもLMの場合とは逆に、非常にリアルな人間像が置かれていた。またS-D法評定においては、平均よりも「拡大的」であるという印象を与えていた。後者4例のSPには、いずれもリアルな人間像は置かれていなかった。4例のうち2例は、SPに人間像を置かず、1例は顔が描かれていない女の子を置き、ペンギンがブランコに乗り、残る1例はムーミンと

ミーを置いていた。「後向きの人間」を描いたLMは2例あった。それら2例のSPは、S-D法評定において、平均より「静的な」という印象を与えていた。

「異性」「人間が単数」「働く人」「大きさのバランスを欠くもの」の4項目については、LMとSPに特記すべき対応関係はなかった。

8. 「動物」について

「日常生活において見うけられにくい動物」が出現したLMはなかった。「愛玩動物」「家畜」「飛ぶ鳥」「さかな」「人の大きさ<動物の大きさ」のLMとそれらのSPには、顕著な特徴はなかった。

9. 「石」について

庭の敷き石等「人工的な手が加えられた石」を描いたLMは3例あった。これら3例のSPには共通して、リアルな人間像が置かれていなかった。1例は顔が描かれていない女の子を置き、1例はムーミンとミーを置き、残る1例はまったく人間像を置いていなかった。「巨大な石」を描いたLMは2例あった。これらのSPには、他のSPにはみられず、かつそのSPの中で異様な印象を与えてそびえる「ガケ」「中世の塔」が置かれていた。特に1例においては、置かれたものの構成空間上の位置がLMもSPも右隅と、同一の位置を占めていた。

10. 「橋（付加物）」について

川に橋を架けたLMは7例あり、そのうちSPでも同

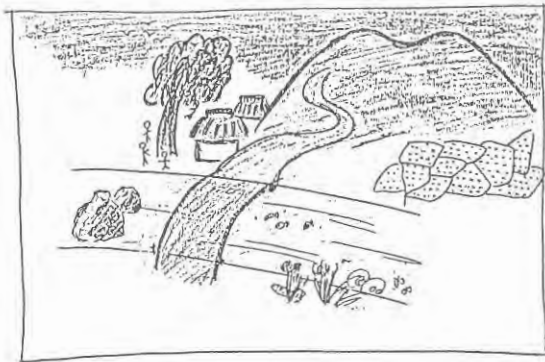


図3-(1) LM

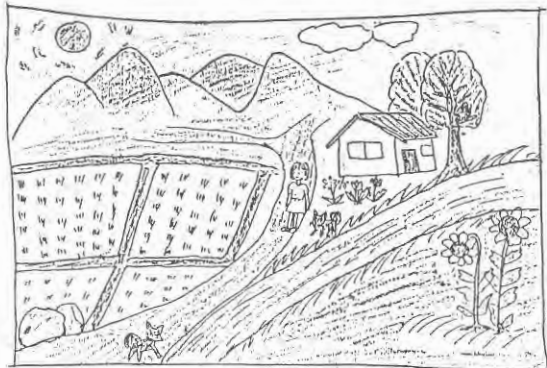


図4-(1) LM



図3-(2) SP



図4-(2) SP

様に川に橋を架けたのは1例にすぎず、残る6例のSPには川も掘られていなかった。SPで川を作った7例は、7例とも橋を架けていた。

11. その他

「混色表現」は17例にみられ、3例にはみられなかった。「混色表現」の有無でSPに共通の特徴があるということとはなかった。

「余白」が気になるLMは2例あった。それら2例のSPに特記すべき特徴はなかった。

なお図3、図4は両作品の例である。参照されたい。

考 察

1. S-D法評定による印象比較について

28尺度のうち、7尺度においてLMとSPの間に正の高い相関がみられた。その中で、「気持ち良い-気持ち悪い」「丁寧な-雑な」「激しい-穏やかな」「闘争的-平和的」「男性的-女性的」の5尺度においては、平均値の間にも差はなく、同一個人内で両作品の印象は似たものであると言える。すなわち、LMからSPを予想す

る上で、その妥当性が高いと言えよう。上記5尺度を眺めてみると、aggressionの大きさや、丁寧で気持ち良い印象を与えるかどうか、という点で、共通した側面を評定しているように思われる。本来ならば、因子分析を行ってその点を確認すべきであったかもしれないが、今回の研究では被験者数が少なかつたため、因子分析は行っていない。ここでは、LMからSPを予想することが可能な尺度はある共通の性質を持っているのではないかと示唆するにとどめ、今後の課題としたい。

また、21の尺度においては、尺度や被験者数の問題もあり、LMとSPの間に相関があると示唆する結果は得られなかった。

一方、評定の平均値について、3尺度において有意差がみられた。LMが、課題アイテムの1つである「山」の描写によって、必然的に空を含む景色となり易いため、「高い」という印象をもたらすことはうなづける。しかし、SPに比べて、LMが、「珍しい」「異常な」と評定され易かった点は注目される。これら2つの尺度においては、両技法間に正の高い相関もみられているので、両技法が引き出すイメージについて、それを描き出させ

る手続きの違いを反映したものと考えられる。LMにおいては、課題アイテムが決まっているが、あらかじめそれを知らされていず、消して描き直すことができない。さらに、「川」というアイテムから導入されるなどの構成上の困難さがある。また、各課題アイテムは、出来合いのパーツではなく、被験者自らが描き、彩色されるので、作品の構成物も、既成のイメージからの隔たりをもち易い。そのために、評定の平均値に差が現われたと考えられる。本研究における評定者が、臨床経験年数が乏しい点を考慮すると、少なくとも初心のうち、LMを用いての personality assessment およびSPの適用決定において、negative な判断を生みがちになる可能性は示唆されよう。

おしなべてみると、LMの印象とSPの印象が逆転することはないかのようであるが、図1、2の例に示したように、被験者によって、印象の相関する度合いは異なっている。両技法による作品の印象が異なる尺度の多い被験者では、技法によって触発されるイメージの差が大きく、人格の異なった面がイメージのなかに展開されているのではないかと考えられる。

II. LMにみられる諸特徴とSPとの関連について

ここでは、LMにみられる特徴とSPとの関連を探った結果より考察をすすめたい。この作業は、LMにみられる諸特徴のもつ意味についての仮説を展開してゆくためにも役立つと思われる。

弘田²⁾は、LMに現われる人間像のうち、思春期に多く出現する「記号化された人間像」のもつ意味に注意を向けている。一方、箱庭において使用される人間像には、精密に作られた、リアルな姿をした人形や、紙粘土などによって「お人形」として作られたもの、本来は動物であるが擬人化され人間的なキャラクターを一般的に与えられているもの、さらには、箱庭遊びをする人が動物に人間的活動をさせる場合などがある。私達は、便宜上それらを、ロールシャッハテストで考えられている、H、(H)、(A)に対応するものと考えてみた。ところで、「記号化された人間像」がLMに出現する場合、人間を遠景に小さく描くための処理法と考えられるものと、ある程度の大きさを持ち、中景または前景に描かれているものとは、その与える不自然な印象に違いがある。「記号化された人間像」は7例にみられたが、前者のようなもの3例、後者4例における、箱庭のなかの人間像を比較した。前者3例においては、全ての人間像に、リアルな人形が使用されており、いわゆる(H)、(A)的な人間像は使用されなかった。後者4例においては、人間像が出現しないものが2例あり、他の2例は、結果に

示したとおり(H)、(A)的な人間像のみが使用されていた。人間像を遠景に、小さく描くこと自体、人間を描くことへの回避的な態度の表われと考えられるが、そのような防衛をとらず、むしろ不自然さを強調してしまうことになるような描写をすることと、箱庭にリアルな人形を置かないことの間には、近縁性があると思われる。

LMにおける「石または岩」という課題アイテムは、しばしば非常に印象的な扱われ方をするが、その定式的な意味はないようである。路端に確固と、進むべき道の道標のように描かれることもあれば、路上の小石として、歩むべき道の荒れた様子を暗示したりする。今回、非常に大きな石が描かれていた2例では、箱庭作品においても、他のパーツと比較して異様な塔や絶壁という形で、他を圧するような空間が設けられていた。それらは、文字通り動かし難く、こだわらざるをえない体験領域があることを反映しているように思われた。

臨床場面において注目されることが多い「川に橋がかかっているかどうか」について、風景構成法における「橋」と、箱庭における「橋」とでは、そのもつ意味、重みが違うのではないかとということが結果より示唆される。風景構成法においては、「川」は初発課題アイテムであるが、箱庭においては、自発的に掘られるものである。川が掘られたものは7例であるが、それらには全て、橋がかけていた。LMでは、橋がかかっているものは20例中7例しかない。また、この7例のうち、箱庭において川を掘ったものは1例のみであった。川に橋がかけられる確率も異なるし、風景構成法において橋を描くものは、箱庭においては川を作らない傾向があるのかとも思われる。砂を掘るという、3次元における自発的な空間の分断と、平面において課題として与えられた作業とは、その喚起する不安、修復を促す圧力が違うのではないかと考えられる。とにかく、LMにおいて橋がないことを、SPにおける同等には問題視することはできないのではなかろうか。

最後に、分裂病をはじめとする臨床群の描画特徴とされているもの¹⁷⁾と、SPとの対応を調べた結果に触れておきたい。「此岸なしの川」や「単山」は、大学生の描画においては、あまり多くみられるものではないし、山を茶色に彩色することなどと並んで、分裂病者の描画特徴として挙げられてもいる。これらの項目に該当した6例のSPでは、3例に怪獣が出現した。それらには破壊的行為をする(2例)か、にらみ合い(1例)といった巨大な攻撃性を秘めたイメージが表現されていた(他の17例には、怪獣は置かれなかった)。また、3例では、

箱庭に置かれたものの中に、著しい大小関係の歪み、全体のイメージの脈絡からみて奇異に感じられるものが置かれているといった特徴があった。対象者は、あくまで一般大学生であり、これらの特徴から、防衛の脆弱さ、現実吟味の障害といった問題は論ずべくもない。しかし、より退行的で、現実吟味のもつ拘束力が緩むようなレベルで箱庭作りが行なわれたと考えることはできるであろう。

われわれが住む風土には存在しないような「動物」が、箱庭においては多く出現することからもいえるように、箱庭作りは、LMと比較して、非日常的な世界に引き込む力が強いのであろう。実際に、S-D法評定のプロフィールで例示したように、箱庭では、LM印象とは一変するイメージの展開がおこりうる。そして、そのような変化が、治療過程でおこったものではなく、LMにおいて、退行的と仮定し得る特徴を示した例では、1回のみの実験の設定においておこったことは興味深いものであった。本研究は、例数が少ないこともあり、今後確認してゆく作業が必要であると思われるが、LMによって、SPにおいて出現するであろうイメージのレベル、置かれるであろう玩具を予測する方法を、より具体的に設定してゆけるのではないかと思えた。現在、箱庭療法については、その適用決定の判断基準が不分明な場合も多い。中井が既に、LMを箱庭療法の適用決定の目安としていることは述べたが、今後、そのような方向においての報告の積み重ねが必要であろう。

まとめと今後の課題

箱庭療法からヒントを得て生み出されたといわれる「風景構成法」を、実験的に同一被験者に試みた場合、その両作品にはどのような関連がみられるであろうか。

対象者にノーマルな一般大学生を選び、治療過程におけるセラピスト要因についてはここでは取り上げぬこととし、両技法によって導き出された作品に関して、(1)全体の印象比較(S-D法評定を用いる)および(2)両者の表現特徴にみられる関連性の有無を検討してきた。結果を要約すると、被験者数が一般女子大学生20名と少数であることを考慮に入れねばならぬが、LMの印象からSPも同じような印象を与えるものになるであろうと推測することが許されるということがわかった。第二に、SPにくらべてLMの方が「高い」「珍しい」「異常な」と評定され易い特徴をもつことが示唆された。これは両技法の差違、即ちLMが「山」の表出を指示することや、各課題アイテムが被験者自身によって描かれねばならぬこと、消して描き直すことができないことなどに関連し

ていると考察された。第三に、両者の表現特徴の中で、特に「人間像」と「石」の表現に関しては意味深い対応が認められたことが指摘された。他方「川および架橋」に関しては、両技法のもつその意味に違いがあるのではないかと問題提起された。最後に、臨時的に有効分析項目であるとされているサインのうち、「此岸のない川」と「単山」を表現した被験者のSPには、他の作品とは異なるイメージの世界が表現され、一定の対応があることが示唆された。

以上、本研究では、一般大学生に実験的に試みたLMとSPが分析対象であるという限界はあるものの、両技法の導入や作品解釈にあたって考慮すべきいくつかの点が示唆されたと考えられる。今後の課題としては、治療者要因を考慮に入れた実験プログラムの企画があげられる。また、整理の方法①で用いたS-D法評定に関しては、選択形容詞対を検討するとともに、若手の心理臨床家の訓練の一つとして、このような作品の印象評定が用いられることも意味があるのではないかと、思われた。

終りに、お忙しい中、ご助言ならびにご校閲いただきました氏原寛教授に心より感謝いたします。

文 献

- 1) 弘田洋二：描画(風景構成法)の研究—その3, 分裂病患者にみられる特徴, 日本心理学会第48回大会発表論文集, 727 (1984)
- 2) 弘田洋二：風景構成法の基礎的研究—発達のな様相を中心に, 心理臨床学研究, 3 (2), 58-70 (1986)
- 3) 岩堂美智子, 奈比川美保子：箱庭療法に関する基礎的研究, 大阪市立大学家政学部紀要第18巻, 183-191 (1970)
- 4) 加藤吉和：登校拒否児童に実施した「風景構成法」について, 東京都児童相談センター, 児童相談 8, 22-30 (1985)
- 5) 河合隼雄監修, 大原 貢, 山中康裕訳：カルフ箱庭療法, 誠信書房(1972)
- 6) 中井久夫：精神分裂病者の精神療法における描画の使用, 芸術療法, 2, 77-90 (1970)
- 7) 中井久夫：描画をとおしてみた精神障害者, とくに精神分裂病者における心理的空間の構造, 芸術療法, 3, 37-51 (1971)
- 8) 中井久夫：精神分裂病者の寛解過程における風景構成法の縦断的考察, 芸術療法, 13, 7-16 (1982)
- 9) 岡田康伸：Sand play technique に関する実験

- 的研究—SD法による分析を中心として—, 臨床心理学研究, vol.8, No 3, 151-163 (1969)
- 10) 高江洲義英：精神分裂病者の風景画と「間合い」, 芸術療法, 7, 7-16 (1976)
- 11) 高柳信子, 鮑戸弘：Semantic Differential法によるロールシャッハインクプロットの意味構造の研究, ロールシャッハ研究V, 107-121 (1962)
- 12) 一谷 彌, 津田浩一, 林勝造：S-D法によるパウムテストの因子的検討—診断のための探索的試み—, 京都教育大学紀要 Ser. A. No47, 1-16 (1975)
- 13) 山中康裕編：風景構成法, 岩崎学術出版社 (1984)
(昭和63年10月11日受理)

Summary

This study examined the Landscape Montage Technique (LM) and the Sand Play Technique (SP) which 20 female university students tried for the first time.

The experiment was carried out by comparing the comprehensive impressions in both techniques, and by pursuing the relationship between the expressional characteristics in LM and those in SP.

The results are as follows.

- (1) In the evaluation of the S-D method (28 scales) carried out by 10 young clinicians, positive correlations, regarding the mean value of the marks obtained, were found in 7 scales.
- (2) The mean value of the marks of LM and SP obtained by the S-D method was evaluated by the t-test. Significant differences were found in 3 scales.
- (3) A meaningful relationship was found concerning the expressional characteristics in LM and SP of figure of human as well as stone. For river and bridge different implications in each technique were suggested.
- (4) In the description of river and mountain in LM, a river with only one shore (at the bottom of the page), and a solitary mountain, are clinically regarded as signs of regression. We found in those who drew as in the above-mentioned, an unordinal world of expressions in SP.